

【研究報告】

看護学生が抱く看護観とその背景要因

大羽詩織¹⁾, 生田奈美可²⁾

¹⁾ 人間環境大学松山看護学部基礎看護学領域

²⁾ 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻基礎看護学講座

(2019年9月10日受理)

【要旨】

【目的】最終学年の看護学生が、どのような看護観を抱いているのか、看護観を構成する因子を示すことを目的とした。【方法】既存の測定尺度を参考に、新たに合計35項目の看護観に関する質問紙を作成した。看護学生を対象に無記名で調査した結果、55人の有効回答を得た。プロマックス回転による主因子法で因子を抽出し、尺度の信頼性は、クロンバックの α 係数で確かめた。抽出された各因子間の関連性は、ピアソンの積率相関係数で求めた。【結果】因子分析の結果、4因子が抽出され、累積寄与率は55.3%であった。尺度全体の α 係数は0.928であった。第1因子を「あらゆる対象への看護の実践」、第2因子を「広い視野で捉えた看護のダイナミクス」、第3因子を「基本技術の構成要素の重要性」、第4因子を「看護の限界」と命名した。【考察】看護観を構成する4因子が抽出されたが、今後、例数を増やして検証的因子分析を行い、4因子モデルの適合性を検討したい。

キーワード：看護学生、看護観、因子分析、信頼度係数、因子間相関

I. 緒言

終戦直後の1945年の総人口7,199万人から人口は増え続け、2010年の総人口12,806万人をピークに、再び減少傾向に入り、2050年には9,708万人にまで減少することが予測されている。一方、国民医療費の動向をみれば、1990年には約27兆円であったのが、2010年には約37兆円、2014年には約41兆円、その後9年間に渡り増え続け、一般会計の約半分50兆円に到達するまでに膨れ上がると懸念されている。新規医薬品と医療機器の高額化、診断技術と治療法の高度化、高齢化率の上昇などを背景に、保健医療費は国家の衰退に影響を及ぼしかねない要因となっている。医療におけるもう一つの問題は、慢性的な看護師不足を如何に対処するかであり、厚生労働省および文部科学省は、医科大学および看護大学の規制緩和などの施策を講じてきたが、医療職者の都市集中と過疎部の不足という二極化がみられ、国民の負託に充分答えているとは言えない現状にある。看護師の養成は、1951年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則（省令）に依拠して行われてきたが、専修・各種学校、高等学校専修科、短期大学（専攻科）、大学のいずれかを経て、看護師国家試験に合格すれば、看護師免許が交付されるという並列型を特徴としている。このうち短大専攻科と大学は文部科学省高等教育局、それら以外は厚生労働省と所管が異なる。看護師は、3K（きつい・汚い・

危険）と忌み嫌われた時代を経て、職場環境の改善や看護職の質的向上が図られ、2004年には約76万人、2014年には約108万人、2016年には120万人を越えたが、なお看護師不足が医療機関から指摘されている。

一方、疾病構造の複雑化、遺伝子治療、延命治療など医療の劇的な変化と多様化が進み、それに対応すべく看護師の職務内容も変化してきた。看護師不足が社会問題になってから年月を重ねてきたが、医療の急速な進展に対応できる看護職の養成も、また、課題となっている（斉藤、2017）。変化するニーズに対応して、看護の知の創造と体系化が図られ（例えば、JANPU看護学士課程教育の質を高めるカリキュラムの開発）、さらに高度医療に対応した専門的能力を培うとともに、自律した看護師を目指し、看護学専攻の大学院の設置と目まぐるしく変遷しつつある。とくに学士課程における看護系人材養成の在り方によれば、卒業までに身に付けるべきコアとなる能力を、Ⅰ群：ヒューマンケアの基本に関する実践能力、Ⅱ群：根拠に基づき看護を計画的に実践する能力、Ⅲ群：特定の健康課題に対応する実践能力、Ⅳ群：ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力、Ⅴ群：専門職者として研鑽し続ける基本能力を取り上げ、卒業時到達目標と教育内容を展開することが示されている。このような時代を迎え、近い将来、看護師となり、医療の担い手となる看護学生は卒業を控え、どのような看護観を抱いて医療現場に臨もうとしているのであ

うか。

看護学生の看護観について、立石らは、看護学生の看護観の育成は、看護基礎教育課程においては非常に重要な課題であるとし、大学入学直後の4月、入学3カ月後の7月、1年後の4月と3回に渡って看護学生の看護観を調査している。その結果、1年次終了後はまだ看護観が明確になっていないこと、また看護観は授業の影響を強く受けることを指摘している。また、栗田らは、卒業前の看護大学生の看護観に、「対象の持つ力を引き出す支援」など11のカテゴリーを抽出、看護の捉え方は“対象者が主体”及び“対象者の支援”などであったと報告している。しかし、看護学生の看護観にどのような背景要因が影響しているのか、統計学的に因子構造の検証にまでは至っていない。そこで、高度化する医療を担う看護学生がどのような看護観を抱いて社会に出ていくのかを明確にし、その因子構造と因子間の関連性を明らかにすることを目的に本研究を行った。

II. 研究方法

1. 対象

教育課程による差異がある可能性を考慮して、3年制看護専門学校および4年制大学看護学部の卒業前の看護学生を対象とした。無記名調査として、属性用紙と質問紙に回答を得た場合に、研究参加の同意が得られたものとするを研究の説明書に明記した。

2. 倫理的配慮

アンケートを行う際、研究の目的以外には使用しないこと、また今回のアンケートによって不利益を被ることは無いことなどを文書と口頭で説明を行い、研究参加を募った。また、回答を拒否した場合あるいは回答の途中で辞退しても、なんら不利益を被らないことを文書および口頭で説明した。得られた資料は、個人あるいは集団を特定できないようにID化して、その照合表は鍵のかかる保管庫に解析終了するまで保管した。

3. 調査用紙の回収方法

研究の目的を文書および口頭にて説明したのち、その場で記入してもらい調査用紙の回

収を行った。その場で回収できなかったアンケートに関しては回収ボックスを設置し、翌日までに投函してもらい回収した。

4. 調査用紙の内容

属性として、性別、年齢、社会人経験の有無、入院経験の有無、通学方法、同居家族の有無とその構成、同居家族との死別経験の有無とその同居家族、祖父母との死別経験の有無とその人物、看護師を志望した理由、看護職を意識した年齢、看護職を志すにあたってモデルとなった人物、教育課程の種類とその教育課程を選んだ理由などから構成

した。看護観は立石ら⁴⁾の開発した尺度(73項目)を参考に、筆者が独自に作成した33項目に予備調査から抽出した「技術において限界があるものだ」、「研究の結果に基づいて行われる」を加え、合計35項目とした。回答は「1:全く当てはまらない」～「5:とても当てはまる」の5段階のリッカートスケールを用い、看護観として該当する数字を一つ選んで回答をしてもらった。下位尺度ごとに尺度得点を算出した。

5. 統計解析

統計ソフトはSPSS (19.0 J windows版)を用いた。質問紙を構成する要因を明らかにするために因子分析(プロマックス回転法)を行い、得られた要因の寄与率を求め、要因内の整合性はCronbach's α 係数を求めた。また、2変量間の関連性は、ピアソンの積率相関係数を算出して判断した。

III. 結果

1. 対象の属性

3年制看護専門学校27人および4年制大学看護学部28人から回答が得られた(回収率88.2%)。全体で、女子学生が46人、男子学生が9人であった。測定尺度の因子構造は、この合計55人を解析対象とした。

2. 看護観質問紙の因子構造

1) 質問項目の検討

尺度を構成する35項目の天井効果およびフロア効果を確認した。尺度の回答が1～5段階であるため、各項目の平均得点±標準偏差が5以上、もしくは平均得点-標準偏差が1以下となる項目を検討したが、削除する項目はないことが判明した。

2) 因子分析による構成概念妥当性の検討(表-1)

まず、35項目について主因子法を用いて因子分析を行い、測定尺度がリッカートスケールであることを考慮し、スクリープロットで因子数を推測した。これを踏まえて主因子法、プロマックス回転にて分析をすすめ、最終的に因子数4(累積寄与率55.3%)を得た。因子抽出の過程において、因子負荷量が0.400未満の項目、因子ごとの修正済み項目の合計相関係数が0.300未満の項目、内容の妥当性の検討により因子内での当てはまりが悪い項目などを検討した結果、「死をも支える」、「人間関係によって成立する」、「患者理解において限界がある」の3項目を削除した(計32項目)。次に、合計55人の有効データを用いて、因子数4、主因子法、プロマックス回転により因子分析を行った。その結果、安定して4因子32項目が抽出された。

3) 因子の命名

第1因子は“看護過程に基づいて行われるものである”、

表-1 看護学生の抱く看護観の因子分析

	因子			
	1	2	3	4
Q.21 看護過程に基づいて行われるものである	.928	-.125	-.081	.004
Q.22 個人や集団を対象として行われている	.867	.051	-.099	-.120
Q.25 健康への手助けである	.747	.005	-.011	.185
Q.16 健康の維持・増進を援助することである	.732	.059	.194	-.111
Q.28 患者のニーズを満たす援助である	.677	.188	.124	.017
Q.23 日常生活の援助を行う	.653	-.163	.289	-.117
Q.20 疾病予防の援助を行う	.633	.185	.045	.081
Q.29 全ての人に平等に行われるものである	.612	-.164	.219	.077
Q.26 あらゆる人を対象にする	.586	-.013	.186	-.029
Q.35 研究の結果に基づいて行われる	.500	.226	-.296	.184
Q.24 人間関係によって成立する	.344	.218	.240	.042
Q.7 人間を知ることである	-.098	.931	-.030	-.212
Q.10 患者の教育指導を行う	.045	.766	-.100	-.072
Q.8 サイエンスでありアートである	-.056	.638	-.134	.029
Q.2 回復への援助を行う	-.172	.583	.433	-.068
Q.9 患者中心に行われる	.003	.534	-.045	-.014
Q.3 相互関係で成り立つ	-.126	.524	.349	.181
Q.6 環境に働きかけることである	.445	.504	-.139	-.068
Q.27 適応を援助することである	.427	.466	-.023	.104
Q.31 環境・看護・人間・健康は関連し合っている	.309	.458	-.104	.161
Q.1 専門性と独自性がある	-.145	.445	.375	-.105
Q.5 人間すべてに行われる	.122	.442	.158	-.108
Q.15 死をも支える	.154	.376	.209	.025
Q.19 広い視野が必要である	-.023	.025	.886	-.079
Q.17 コミュニケーションを必要とする	-.105	-.068	.778	.222
Q.30 対象に合ったケアを提供する	.259	-.219	.646	.107
Q.14 安全・安楽へのケアを実施する	.129	-.064	.645	.054
Q.11 専門的な知識と技術を必要とする	.028	.051	.639	-.107
Q.13 自立を促していくものである	.050	.026	.476	.260
Q.18 看護は変化する	.204	.105	.328	-.191
Q.34 患者理解において限界がある	-.108	.347	-.053	.627
Q.12 技術において限界があるものだ	-.437	.075	-.040	.523
Q.32 経済面・社会面において限界があるものだ	.229	-.182	.130	.520
Q.33 対象を中心に行われるものである	.242	.000	-.020	.501
Q.4 病気を持つ人に行われる	-.001	-.254	.111	.421
寄与率(%)	32.28	42.95	49.85	55.31

“個人や集団を対象として行われている”, “患者のニーズを満たす援助である”, “日常生活の援助を行う”など10項目で構成されており看護学概論の内容を中心としていた。看護を行う上で必要な要素が集中していることから「あらゆる対象への看護の実践」と命名した。第2因子は“サイエンスでありアートである”, “相互関係で成り立つ”, “専門性と独自性がある”, “人間すべてに行われる”など11項

目で構成されていた。そこで、他者や周りの環境などの刺激を受けること、相互関係において成り立つことから「広い視野で捉えた看護のダイナミクス」と命名した。第3因子は“コミュニケーションを必要とする”, “安全・安楽へのケアを実施する”, “自立を促していくものである”など6項目で構成されていた。看護における専門技術を中心としていることから「基本技術の構成要素の重要性」と命名

した。第4因子は“患者理解において限界があるものだ”、“病気をもつ人に行われる”、“技術において限界があるものだ”など5項目で構成されていた。看護は対象が限定されているとも考えられるため、対象の限定も含んだ「看護の限界」と命名した。

4) 内的整合性による信頼性の検討 (表-2)

看護学生の看護観の4つの下位尺度について、Cronbach's α を算出したところ ($n=55$)、表-2に示したように、「あらゆる対象への看護の実践」、「広い視野で捉えた看護のダイナミクス」、「基本技術の構成要素の重要性」の下位尺度において、高い内的整合性が得られた。尺度全体では、 $\alpha=0.93$ を得ており、測定尺度として信頼性は高かった。ただし、「看護の限界」の下位尺度においては、 $\alpha=0.59$ と低かった。

表-2 看護観を構成する各因子の信頼性係数

	項目数	クロンバックの α 係数
第1因子	10	0.930
第2因子	12	0.875
第3因子	5	0.823
第4因子	5	0.589
全体	32	0.928

第1因子：あらゆる対象への基本的看護実践
第2因子：広い視野で捉えた看護のダイナミクス
第3因子：基本技術の構成要素の重要性
第4因子：看護の限界

5) 看護観を構成する各因子間の関連性 (表-3)

第1因子と第2因子 ($r=0.570$) および第3因子 ($r=0.557$) との間には有意な正の相関が認められ、また、第2因子と第3因子 ($r=0.342$) との間にもやや弱い有意な正の相関が認められた。しかし、第4因子は、他の因子との間に有意な相関が認められなかった。

表-3 看護観を構成する各因子間の関連性

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子				
第2因子	0.570**			
第3因子	0.557**	0.342*		
第4因子	0.219	0.231	0.106	

* $p<0.05$, ** $p<0.01$; Pearson's product-moment correlation

IV. 考察

看護師養成機関で所定の課程を終えようとする学生を対象に、これから身を置こうとする看護師の職能にどのようなイメージをもっているのかという看護観を明らかにしようとして本研究を実施した。看護観は、当然ながら受講した個々の授業科目から影響を受け熟成され、病院実習での実践教育を経て醸成されたものと考えられる。看護学生における看護観を因子分析した結果、スクリープロットの結果

と一致した4つの因子が得られた。寄与率も55.3%であり、妥当と判断した。第1因子の「あらゆる対象への看護の実践」は、1年次に受講する看護学概論を中心とした項目が多く含まれていた。看護学概論では「看護とは何か」から看護の歴史や看護の本質、死生観といったものを学ぶ。しかし、この因子には「研究の結果に基づいて行われる」という項目が含まれ、予想外であったが、看護研究を通じて研究の必要性を感じ、科学的に分析された根拠が重ねられ有用性の認められたものだけが臨床で実践されていることを学んだ可能性が考えられる。第2因子の「広い視野で捉えた看護のダイナミクス」には、看護における要素が広範囲にわたって含まれていた。栗田らは看護大学生の看護の捉え方は“対象が主体”及び“対象の支援”などであったとしており、これらは本研究の「あらゆる対象への看護の実践」、「広い視野で捉えた看護のダイナミクス」に該当するものと矛盾しないように考える。第3因子の「基本技術の構成要素の重要性」には、看護学実習において、学生が重要と考える看護技術の構成要素を実感した内容が多く含まれていた。進化し続ける医療に対して、卒業後に社会で新たな看護技術を身につけるためには、学生の間に習得できる技術は、その必要性を理解し、実践できる必要がある。第4因子の「看護の限界」には想定していた「患者理解において限界がある」や「技術において限界がある」以外にも「病気を持つ人に行われる」や「対象を中心に行われる」など対象を限定した項目も含まれていた。このことから医療職者として対象が限定される看護師の職能もひとつの限界もつことが推察される。この「看護の限界」は、「あらゆる対象への看護の実践」、「広い視野で捉えた看護のダイナミクス」、「基本技術の構成要素の重要性」などの他の因子と有意な相関が認められなかった。従って、「看護の限界」は、他の因子とは異なった方向性をもつ項目から構成された因子と考えられる。学生の臨地実習は教員と熟練した看護師の指導のもとで行われるため、そのことが影響しているのかも知れない。本研究では、標本数が少なく、さらに標本数を増やして、共分散構造分析の検証的因子分析を行う必要があるものと考えている。

文 献

- 栗田孝子, 橋本麻由里 (2010) 学士課程の看護基礎教育を考える卒業時の学生が捉えた「看護観とその形成に影響を及ぼした事柄」から, 相山女学園大学看護学研究, 2: 17-22.
- 齊藤しのぶ (2017) 看護教育の動向と今後の課題, 日薬理誌, 149: 4-8.
- 立石有紀, 岩本真紀, 近藤美月他 (2002) 看護学生の看護観の形成—看護学概説, 看護理論の科目前後における看護観の変化から—, 香川医科大学看護学雑誌, 6 (1): 63-67.
- 濱田悦子 (1990) 『新教育学大辞典』「看護教育」, 第一法規出版, 70.

Abstract: *Student's view of nurse occupational function: A factorial analysis. Journal of nursing Science in Human Life, 2: 27-31 (2019).* Shiori Oba¹⁾ and Namika Ikuta²⁾ (Fundamental Nursing Laboratory, Faculty of Nursing Sciences at Matsuyama, University of Human Environments¹⁾ and Fundamental Nursing Laboratory, Graduate School of Health Sciences, University of Yamaguchi²⁾)

We investigated a student's view of nurse occupational function using a principle factorial analysis. By reference to published scale, we developed a new inventory which consisted of 35 items. We used 55 nursing students of the last grade for this study. The principle factorial analysis with a promax rotation method extracted four factors (contribution rate = 55.3%). We named the first factor for "nursing practice for every subjects," and the second factor for "nursing dynamics from wide field of view," the third factor for "importance of fundamental skill," and the forth factor for "limitation of nursing". The instrument was found to have appropriate internal consistency, with an average Cronbach's alpha coefficient of 0.928. The Pearson's correlation coefficient indicated that there was a significant positive correlation among the first, second, and third factors. However, the fourth factor failed to show any significant correlation with the other factors. We suggest that student's view of nurse occupational function may consist of four factors, but in future study we have to determine the validity of this model using confirmatory factor analysis following an increase in sample size.

Keywords: nurse occupational function, student's view, factorial analysis